不遇の死霊術師

名無しの権左衛門

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なろう小説の極振りや魔物使いでアーチャーな運営が敵で強さを求める負けず嫌いな小説に、触発されて書いてみた。

目　次

不遇？負の印象を過剰な正にする商法である。つまり、唯一無二・天下無双の序章であり、他者を劣悪にみせることで自身を他者より優越であると示すよくある小説題名だ。 ―――――――― 1
2：英語をなるべく日本語に改訂するよう心掛ける。 ―――― 6
首都は基本的に、裏も表もおぞましい。　人は見かけによらないが、指名手配犯の写真をみてそうおもうか？ ―――――――― 10
国家に性善説は通用しないが、現実を見ている分妥協してくれる。 15

不遇？負の印象を過剰な正にする商法である。つまり、唯一無二・天下無双の序章であり、他者を劣悪にみせることで自身を他者より優越であると示すよくある小説題名だ。

最近、ＶＲＭＭＯが流行っているらしい。
それに便乗してみようと思ったんだけど、なんとくっそ高い。
俺は頑張って高校生の夏休みを、自給の高いくら寿司のバイトを週休１日８時間で全力で働いた。
そのかいあって、手取りが十万を超えることができた。
身体はもうボドボドだぁ。
始業式が始まってしまって、やる時間がないじゃんなんてなってしまった。
しかしこのＶＲＭＭＯというか、このＶＲソケットは思考加速もできるらしい。
っつーわけで、俺は毎日寝る前の３時間をゲームに費やすことにした。
目を閉じて寝るっつっても、頭を休めることなんてできていないから、ちゃんとゲーム時間を決めて行っている。
この県もネット・ゲーム規制条例が公布されちまったかんなぁ。
容易にゲームもおちおちやってらんねぇんだ。
お医者さんが、ＶＲゲーをやっても体は休まるが脳は休まないので、
しかりと５時間以上の休眠を挟むようにと警告している。
それでも行ったものは、脳細胞が死んでしまい寿命が短くなったり記憶障害等が頻繁に発生してしまい、社会問題になりかけたりした。
まあ不幸になる自由というのもあるので、そこまで言及されないんだけど。一部では暴走しているが、健全な人たちはちゃんと時間を決定してＶＲを楽しくプレイしているぞ。
〝Ｆｒｅｅ　Ａｃｔｉｖｅ　Ｏｄｙｓｓｅｙ〟

説教臭くなってしまったから気を取り直して、ゲームをやっていこうと思う。このゲームは題名の通り、自由な旅行としていろんなところに行けるんだ。どういうところって？まあ、本当にいろんなところさ。

サービスが開始してすぐに、有名な浮遊城とのコラボがあってそこにいけるんだ。コラボは一定期間で終了してしまうんだけど、その浮遊城は、内容を刷新してうまくそのゲームに合うようになっている。

著作権もあるので、外見も全く違うやつになるが雰囲気は味わえるんだ。

現在そのコラボは終わっていて、べつのコラボがあるんだ。

まあそっちにはまだいけない。なにせ、チュートリアルすら終わっていないからな。

まずはゲームをする前に、時間帯を確認しよう！

寝る前の３時間前、通学準備よし、整理整頓清潔よし、尿意と水分摂取よし！

緊急停止ボタン作動確認よし、緊急切断システム正常、事前のＷｉｋｉ確認よし。

ではでは、いざ参ろうではないか！

俺はＶＲ用の通信ルーターに電源が入っているのを確認して、ＶＲソケットをかぶる。

「ようこそ、〝Ｆｒｅｅ　Ａｃｔｉｖｅ　Ｏｄｙｓｓｅｙ〟へ！」

「ここは？」

目が覚め意識を覚醒させると、そこは機械仕掛けの部屋。

意識は視覚を認識するが、自身の四肢を確認できずにいる。

「ここは原始の間です。今からゲーム内設定を詰めていきます。

すでに思考加速が実行されておりますので、ごゆるりと焦らず決定していってください」

「はーい」

「はい。いいお返事です。最初にお名前からどうぞ」

すでにやろうとしている職業は決まっているべ。だから名前も即

決！
「ヤミです」
「ヤミさんですね。では、性別や姿かたちを決めてください。
ですが、顔だけは現実準拠になっておりますので、ご了承ください」
精神的な影響だって聞いた。
また男性であっても女性を選べるのは、肉体的特徴だけで他の部分の再現をしていないからという理由のほか、男女差別やら障碍者への人権侵害になるからだという。
というわけで、俺は男性にした。別に異性にする理由もないし。
身体的特徴や顔の変更率１００％を超えなければ、自由に変更できる。
比較的左右対称で、発達障害な口やあごのゆがみ、歯並びや眉毛の調整。
肌の整理・鼻の調整等等。
完成した俺は、単なる健康的な男子になることができた。
このコンプレックスが仮想空間といえども克服することができるのは、非常に愉快なもんだ。現実だと金と感染症のリスクの兼ね合いがあるので、容易に変更不可能なんだよ。
俺は眼前にある鏡に移る自身の顔に満足した。
勿論肉体の方もだ。電子世界なので、アレルギーや蕁麻疹・アトピーもない。
乾燥肌による痒さもないし、本当に快適だ。
ふけとかそんな処理があったら嫌すぎるけどさ。
「次に職業とステータスをお願いします」
「おう！」
空中に浮かぶ球体は、俺に数字や文字列の羅列を見せつけてきた。
このボードとにらめっこするのだ！
職業はいろいろある。
何個でもできるが、いろんな職業と兼ね合いを持たせると、上級職に向かわせる経験値が膨大になるんだそうだ。
だから最初は一つの職業だけを重点的に育て、最上級職か上級職に

なったら別の職業をやればいいようだ。
ただし金と免許がいるのは、どこの世界でも同じらしい。
そこで、攻略サイトではやるのはともかく、免許や資質等ステータスだったりなんなりが必要なもの、最初でなければなりにくいものを紹介していた。
一つ目は、なんといっても勇者。
最初は勇者見習いで、つぎに勇者になるんだそうだ。
そこら辺の調整はよくわからないけれど、カルマ値が微動する今作では勇者見習いにすら非常に困難らしい。
わずかな言動で、善悪が変化する。
基本的にカルマ値は性悪説で変動するので、悪になりやすいので勇者になるには圧倒的性悪説をねじ伏せる善性が必要になるらしい。
現段階では０なので、勇者見習いになれるんだとか。
これになれば、カルマ値は０で固定され勇者になるための試練で善を１０００貯めないといけなくなる。
そういう苦行を行った先に、勇者という特別席に座れるのだ。
ちなみにカルマ値は、１００以上の善性になると性善説を取るようになるので、容易なことで悪性に戻ることはかなわなくなる。
こういうのは職業による働きが、世間に浸透してしまうため逆性のカルマになれないのだという。
つまりあくどいことをしていても、世間的には善性であるという質の悪いものだ。
「えーと職業はっと」
そんなこんなで俺が選んだのは、死霊術師だ。
ネクロマンサーともいう。
なぜこの職業を選んだのかというと、やっていることが悪なのに善性にならないと取得できない矛盾した条件をもつ職業だからだ。
善悪を行き来する面白い職業で、悪霊の対峙や土地の浄化・狂人への鎮静化等人の慰霊に大きく携わるものなんだ。
俺は顔が醜かったから、慈善事業やらヴォランティアをしても化け物扱いされた。だからこの仮想世界だけでも、誰かの幸せのために戦

いたいんだ。
まあ醜いのに偽善活動するのかって言われても、震災時に助け合いというのがいかに大切か学んだからだよ。だからといって押し付けるものでもないけどね。相手の取捨選択を優先するよ。
「ステータスは？」
いろんなステータスがあるけれど、どれに振り分けるかって言われるとその他に属するものだよな。
俺はこの顔で分かったことがある。
まずは容姿が１０割。次に清潔感という雰囲気、活動による信用、時流の運、個人個人のカリスマ、度胸で人生が決定する。
そんなわけで、その他に属するステータスの魅力と運に分けることにした。
「決定だ！」
「はい、ありがとう！　じゃあ、簡単にこの世界の事説明しようか？」
「いや、結構。すでに情報は集めてるから」
「そう？じゃあ、行ってらっしゃい！」
そういうわけで、俺はこの世界に飛び出したんだ。

２：英語をなるべく日本語に改訂するよう心掛ける。

「この依頼を受けるのね？」
「はい。この土地浄化をお願いします」
「はいどうぞ、いってらっしゃい」
今俺は最初の町で、ネクロマンサーの職業依頼をこなしているんだ。
これをこなすたびに善性によって行くのがわかる。
心中は除外されるが、表に出せば即効でカルマが変動するんだ。
さらなる慈善事業のために、カルマは１００を超えさせたい。
また職業クエストをクリアすると、敵を撃破するときと同じように経験値が入るのがいいね。このゲームは少々特殊で、職業とキャラ自身の経験値が違うんだ。
ネクロマンサーが、魔物を倒しても職業経験は上がらないがプレイヤー経験が溜まる。逆に戦闘職が魔物を倒すと、プレイヤー経験よりも入ってくる。
つまりは実績みたいなものかな。
ちなみに自分の実力に合わない行動をした場合、プレイヤー経験は上がるが職業経験は上がりにくいらしい。下克上はやらないほうが、いいぞっていうこった。
「あんちゃん、またこの依頼を受けてくれたんだってな！」
「はい！　皆様の健康健やかな生活の為、頑張りますよ」
「ありがてえ。ヤミ、こっちだ！」
「わかりました！」
依頼のある村に来て、鎮魂・慰霊・浄化を行う。
この村は魔物の森が近いせいか、たまに襲撃されてその際に人が殺されることがある。惨殺されることがあるので、鎮魂・慰霊・浄化は大切なんだ。
でクエストクリア１００件目なんだけど、この彷徨える魂とか無念の魂・刹那の侍魂とか１３４個くらいある。何に使うのかわからないし、非売品扱いで売れない。さらに捨てることすらできないというも

の。
幸いアイテムカバンの重量現界に引っかからないので助かっている。
こんな肥やしどうするんだろう？
そういえば、この儀礼剣も白銀で作られただけのおもちゃなのに、無駄にするどいんだよな。何をするためなんだ？筋力補正―１０とかなっているが。
「じゃ、頼むぜ」
「はい。お任せを！」
というわけで、除霊バトルです。
訳わかめだと思うけど、ほんとうにあるんだよ！
別に相手が人生を語ってそれを口説き落とすわけじゃない。
無念や苦しみ悲しみ辛さ痛さを、俺に向かって念を向けてくる。
それに耐えてこちらの術で抑えてまとめ、この地から引きはがすのが役目なんだ。
〈イタイ　苦シイ　怖いヨオ　死にたクなイよお〉
〈オ前も　纏めテ　あノ世へ　連レて〉
「残魂よ　世に呪縛されし者共　我　救済する者　今　解放する」
ぐおおお!?
身体全体に執念が押しつぶしてくる！
負けてられっかよ。仮想とはいえ、この世界で生きていた者たちだ。
ならば、この俺の手で、完全に救済してやる……！
お前たちに拒否権はないのだ！
くらえ、偽善の志。
「救魂　解放　呪縛　散解！」
〝ジャスティスソウル〟
〈　嗚呼　此処が　ヴァルハラ　か　〉
〈　天獄　に　やっと　行ける　のね　〉
餓鬼と化した大和魂と救われぬ魂を入手した。
今日も又、魂か。何個集めればいいのやら。

「終わりましたよ」
「ありがとう……有難う……！」
握手と共に涙を流して感謝された。
よかった。この人も苦しみから解放できたんだ。
たまに怒りを買うからなぁこの仕事。
というわけで、依頼主の個人的な報酬を固辞して、正式な報酬を職安よりもらい受けた。魔法も剣も銃もあるけれど、ギルドとかそんなものはないぞ。
基本的に日本語が多い。
それはともかく、今日も俺はとある場所へ来た。
そこはネクロマンサーにとって大事な訓練場だ。
つまり墓場だ。
さらにこの町の北にある王都に行けば、そこら中に霊がいるので好きに職業経験を積める。そう、人生が修行となるんだ。
「さて……俺の力をみせてやる！」
今日のお相手は、不倫した元夫が再婚相手に美人局されカツアゲの後臓器売買で消毒不十分のメスによって内蔵へ感染症が発生し、間もなく死んだ自業自得な男の墓だ。この墓は、元妻が作ったもの。
不倫された理由が不明瞭のまま、夫が臓器を抜かれて帰ってきた。
そのあと高熱と吐血を繰り返し、最後は絶叫を上げて死んだのだ。
彼女は無念と後悔と失われた希望ある未来を夢現に夢想しながら、この墓を作ったのだ。簡素な木の板。そこに墨汁で書かれた彼の名。
同情全くなしで、全力サンドバッグアタックを行う。
ヒャッハー！無念を抱いて地縛霊になった奴をフルボッコにすんの、楽しいぜ！
ふーっ、職業経験が上がりまくるわー。
まあ、こんな娑婆でやらずとも、王都の広場で日向ぼっこをする真似をしながら、除霊・鎮魂・慰霊・浄化をした方が簡単に上がるんだけどな。
ただ、あそこの城下町に入るのに、許可証や資金が必要だからあま

りいけないんだよ。

首都は基本的に、裏も表もおぞましい。　人は見かけによらないが、指名手配犯の写真をみてそうおもうか？

「これは？」
「王都で鎮魂祭をやるので、死霊術師の方々に招待状です。
　といっても、あなたしかいないんですけどね」
「この町は、が付きますよ」
「そうですね。あ、そういえば、慰霊１００件おめでとうございます」
「いえいえ、私も働けてうれしいですよ」
「あなたのおかげで、この町にたまる鬱憤が晴らせて町長も嬉しがっていました」
「そうですか。あまりこういうのもなんですが、また慰霊等死霊術師の力が必要な依頼が
　ありましたら私に斡旋してください」
「私情と個人的な支援格差はだめなんですが、現状あなたしかおりませんし
　構いませんよ」
　俺は感謝を述べて、その鎮魂祭へむかうことにした。
　鎮魂祭っていう言葉は、あまりよろしくない感じがするが俺は別にいいと思う。依頼先でも、仕事前に依頼主の方と共に楽しくやると怒ったり興味本位や雰囲気に混ぜてほしそうに霊が出てきたりする。
　そうすると除霊や慰霊が簡単に済むんだ。
　そんなわけで、俺は祭りやら文化にして市井の心に刻む方法に関して全面的に肯定するよ。
「始まりの王都だ。入場料は――」
「紹介できました」
「おお、あなたが噂の始まりの町の死霊術師ですか。
　どうぞ、ようこそおいで下さいました」
「ありがとうございます」

門をくぐると、そこは別世界というべきものだった。
始まりの町は、昭和日本家屋という感じでごったがえしていた。
しかしこの王都は、基本的に白い石ばかり。完全に欧州と化している。
世界観がごった煮しているんだよなぁ。面白いからいいんだけども。
行くのはこの王都にある職安だ。
普通は王城に向かうのだが、この鎮魂祭は戦争の慰霊なのでいろんな人が集まる。なので職安経由は職安に向かうのがいい。
向こうからもそのように指示でてたし。
「お、君が始まりの町の死霊術師か」
「はじめまして」
職安で紹介状を提出すると、受付の青年がそういう。
物珍しそうだけど、本当なんだよなぁ。
「知っているだろうけど、明日がそうさ。処理はこっちがしておくから、これをもって王城にいきな。同業者がいるから、リハーサルしてけ」
「わかりました」
俺は青年に封筒をもらって、出店や市場がでている広場に来る。
色んな人が行きかい、人を呼び込むための声が響き渡る。
そんな中俺は、広場にある噴水近くのベンチに座る。
涼しんでいるように見せかけて、慰霊と浄化・鎮魂の術を使う。
「っ！」
俺の体力や魂を削る重圧。
そして術をつかうとさらに鮮明にわかる、〝死〟と〝殺〟の意思。
遠巻きから見てもこの王都は、圧倒的な死の雰囲気を周囲に放っていた。
最初はそれに息をのんだが、今では俺の実力を測るのにちょうどよいものとなっている。
色濃いと実力にあっておらず、周囲に漏れ出すように見えると自分の実力が高くなった証拠だ。少しの残滓も逃さない。

〈誰ダ　我が眠りを妨げるモノは　姿を　曝せろ〉
〈殺すコロスコロすコロ　コ　戮す〉
〈此処は　王の御坐　何人たりとも　犯す事は　赦さぬ〉
〈無礼者　跪け〉
　座っているから跪けんよ。そこらで購入した焼き鳥を頬張りながら、俺の状態をごまかす。だがこの冷や汗と恐怖を誤魔化すことはできない。
　あまりの恐ろしさに、貧乏ゆすりをしてしまう。
　性悪や性善に操られるプレイヤーがいるであろう喧騒を睨みつけながら、
　圧倒的な権威的象徴を相手する。
　まあ、もうわかっているだろうが、この王都は戦場になっただけではなく王の上にいる法皇の墓所の上にも立っているのだ。
　魔法やら魔術的見解で、龍脈効果があるとしてこの地にいろいろ集約しているのだという。
　あまりの恐ろしさだ。その政策のおかげで、霊験もはるかにおどろおどろしいものに変貌している。この体験は他者にはわかるまい。

「……」
「よおそこの兄ちゃん」
「はい？」
「あんた、プレイヤーか？」
「そうですよ」
「そうか」
「何か御用で？」
「珍しい服着ているな、なんてなぁ」
「初心者の服なので、金になるものはありませんよ」
「どういう目したらそう疑うんだよ」
「貧弱な見た目で絡んでくる者は多いのですよ」
「前途多難だな」
「よくある話です」

見た目山賊っぽいごろつきだが、背中に見えるのは何とも大きな斧。
戦士っぽい。何か特殊技能か歴戦の証をもっているのかねぇ。
そのおかげで、そのいかつい顔がさらにいかつく見える。異様だ。
「そうだ。俺は戦士のラギナだ」
「？　死霊術師のヤミです」
「やっぱそうか……お前が唯一の被害者か」
「なんのことでしょう？」
なんのことか。別にウィキで自分がしたいことを検索して、そのままやれそうなものを選んだだけなんだけどなぁ。
で、案の定ｗｉｋｉでそういう嘘っぱち情報が流れたみたいだ。
しかしその情報は運よく運営に消され、ちゃんとした情報になった。しかし、この情報が嘘だとなったら、ゲーム運営に支障が出るということでなにかあったらすぐに対応するようにしたいと言っていたらしい。
「謝礼もらえるぜ」
「きっとリセットの無料実行なだけですよ。再生成に１０００円かかりますからね」
「ケチだよな」
「人生にやり直しはありませんよ？」
「そだな。で、ヤミはなんでまた、そんなもん選んだんだ？」
「単純に偽善といわれる慈善事業をしたかったからですね」
「各々いろいろあるがよ。戦闘が売りなんだから、そっちもためしたらどうだ？」
「死霊術師だけでくっていけなくなったら考えて見ましょう」
「ここで会ったのも何かの縁だ。フレ登録しようぜ」
「わかりました」
俺はこの屈強ないかついごろつきっぽい戦士、ラギナと別れた。
といっても俺は、あの会話中でも絶賛鎮魂戦闘の最中だったんだがね。
やはり象徴の群衆だ。非常に厄介。だがこの急激に増えていく職

業経験を尻目に、徐々に脅威を抑えられて行っていることに快楽を覚えているのも事実だ。

クッキーゲームが好きだから、このくらいの作業なんぞ造作もない。

〈幾珀　幾億　之　時代を　超えて来た　兵共　を　鎮められるか〉

お前たちには負けない。今敗北したとしても、必ず鎮めて見せる。

国家に性善説は通用しないが、現実を見ている分妥協してくれる。

「ようこそ、始まりの町の死霊術師」
「初めまして、ヤミです」
「皆様がお待ちです」
時間が来たので、一度鎮魂をやめてこちらの王城の第一南門に来た。
そこにいる衛兵に、こちらの手紙を渡せば奥に通される。
ここら辺は警備が厳しく、あまり人の目がない。
やはり重要地点はちゃんとしているな。
そして俺の目に見えるのは、強大な霊の力。
視界を埋め尽くすこの力は、龍脈やら他の霊以上の何かがこの場に多くとどめられていることが容易に判明する。
俺がこの鎮魂祭が得られることは結構多そうだ。
それに相手がＡＩだろうが、質疑応答に応えられる能力はあるだろう。
だからこちらの質問や知らないことを先輩死霊術師のやつらは、教えてくれるだろう。
「拝謁時間が間近です。王に無礼を働かないでください」
「わかりました」
そうして長い階段を上ってへとへとになって、ようやく最後の門番に導かれたその先。普通では入れない王城の謁見の間に入れた。
たぶんこの国の王に合うのは、始まりの町出身者では俺が最初だろうな。
このオープンワールドは、他にも町があるだろうしその町の出身者もいるだろう。だからこの始まりの町出身者という表現をしたんだ。
きっと死霊術師は、他にも存在しているだろう。
そうじゃないと需要なしとして、死霊術師の職業がなくなるだろう

から。
時間になった。
「今年も鎮魂祭を行えることを、天日様に感謝せねばな。
さて、明日は諸君らも存じているだろう鎮魂祭がある。
この鎮魂祭は、この王都を含め国家の安寧のため地政学的優位の為、全力で執り行っていただきたい。死霊術師になるには、先天的で繊細な能力がなくてはならず、さらに頭脳明晰さや他社に信用される魅力がなくては成り立たん。
そのような稀有な能力をもった貴殿らを、５０名も抱えることができて非常にうれしく思う。貴殿らに国境はなかろうが、どうか懐かしく思う故郷をこの王都もついでに思い出してほしい。では、よろしくお願いいたします」
俺は礼をした。他のやつらはしなかった。
一応もなにも、雇用の関係なのだからここは偉ぶらず会釈をする。
しかしこいつら会釈しないとは、教養が低いな。
それとも王の言うような希少性から、選ばれし者として天狗か傲慢になっているのだろうか。
俺はこの職業に誇りを持っている。だからと言ってその境遇に驕らず、毎日の出逢いを大切にして仕事にとりかかっている。
王が退室すると、大臣が口を開く。
「詳しい日程はこちらの封筒に封じてあります。
皆様、明日は宜しくお願い致します」
大臣の指示で動く配下は、俺たちに封筒を渡していく。
受け取った奴らは、そのまま帰っていく。
彼らは見えないのだろうが、俺ははっきりと見えてしまった。
その黒い笑みを。
俺は唖然としてしまい、受け取った後も放心してしまった。
「死霊術師殿？」
「っは、はい」
眼前には髭を蓄えた紳士風の方がいて、俺に確認を取ってきた。
危ない危ない。放心状態でここに居座るところだった。

「すみません、すぐに出ていきます」
「申し訳ございませんが、こちらにいらっしゃってください」
「へ？」
思わず動揺し、聲が震えた。
何か間違えたことをしてしまったのだろうか？
放心か？放心なのか!?
ゲーム開始早々、やっちまったのだろうか。
「勘違いさせてしまい申し訳ございません。王にあって頂きたく申し上げます」
「はいっ」
あまりの事件に声が上ずる。
俺の様相が面白かったのか、微笑んでご丁寧に案内していただいた。
やべー、王に目を付けられるとかぱねーわ。
指名手配ってなかったよな？まさかプレイヤーが、何かしたのか!?
だとしたら普通にまずい状況なのでは!?
といっても社会経験が十全じゃないから、どういう対策を立てればいいのか全く不明瞭だ。未知なる状況に、俺の心拍数は上がるばかりだ。
「樂にしなさい」
「はい」
がちがちに固まる。
先に着席してどうぞと譲られたので、失礼しますと一礼して座る。
あまりのガクブルだ。
どんな無理難題を押し付けられるかたまったもんじゃない。
周囲には上から数えた方が早そうな大臣がたくさんいらっしゃる〜〜〜→
「恐れる必要はない。ただ確認しておきたいことがある」
「ナンデショウ」
「君は始まりの町にて、たった一週間で１００件も鎮魂・慰霊を行ったそうじゃないか。その腕を見込んで、不測の事態に備えてほしい」

「？」
「……今年は第一皇帝憲法公布の参千年記念だ。つまり、国として成立するために戦った多くの将兵が、いろいろ湧き出てくる。このいろんな意思を抑えてほしい」
「なぜ小生にそのようなことを？」
「最近は文化や化学・魔術の発展によって、自然崇拝を主幹とした宗教離れが深刻化している。おかげで、死霊術師の人手不足と高齢化が深刻なんだ」
　大日本民主主義帝國と同じ状況に陥っているのか……。
　さらに高齢化による能力の低下もあるのだろう、人手不足と共に高齢化の言葉もでた。つらい現実だな。
「なぁに気負う必要はない。最後列で先輩方の鎮魂術を見て、学んでくれればいいんだ」
　王様は朗らかに笑う。
　よかった。容姿とプレイヤー経験・職業経験が、完全な信用につながっている。プレイヤー経験も、運よりも信用に大目に振っている。
　魅力もいいんだけど、必要以上に人の視線を集めてしまうので、これもある程度まででいいだろう。
「そうだな……。死霊術師に関する写本を君に授けよう」
　俺は王様の隣にいる大臣より、死霊術師について書かれた本をもらった。
　写本と云うのだから、きっと本物とは一部変更を加えられているだろう。
　如何に未來の熟達した死霊術師になる人間であっても、そう簡単に秘術関連を見せるわけにはいかない。普通はそう考える。
「死霊術師の可能性の一部しか、そこに書かれていない。完全な答え合わせは、君がその眼で直接見るんだ」
「はい」
「では、さがっていいぞ」